◆「協力体制を築くことで継続的で効果的な進路指導を実現」
（進研ニュース　VIEW21　1999.10）

3 協力体制を築くことで継続的で効果的な進路指導を実現

進路指導の中高連携とは？

中学校の進路指導を高校の指導につなぐ

冒頭にも述べたように、生徒の目的意識、進路意識の低下が高校での進路指導の大きな課題となっている。ある高校教師は次のように語る。

「大学入試を受ける直前になって、急に志望学部・学科が揺れ動く生徒が増えています。自分の生き方や将来に対する考えが確立されずに曖昧なままだから、こういうことが起きるのだと思います」

そんな生徒への対応として、職業研究や大学研究に力を入れている高校は多い。だが生徒の人生観、進路観や職業観を育成する指導は、本来は高校だけでできるものではない。子どもが自我に目覚め、自己探求が始まるのは中学生の時期だと言われている。中学生のときから自分の興味・関心、適性について考えさせる機会を設け、高校ではそれを発展的に継承していく形が望ましいと言えるだろう。

現在中学校では、進路指導において様々な取り組みをしている。具体例を挙げると以下のようになる。

○職業調べ、職場訪問、1日職場体験
○社会人を招いての進路講話
○母校出身の現役高校生を招いての高校生活の説明会
○生徒による「自分史」や「将来の夢」に関する作文など
○進路意識調査の実施

言うまでもなく、こういった実践は多くの高校でも同じように行われているものである。だからこそ、中学校と高校が連携を図れば、継続的で効果的な指導が期待できる。特に今は、2002年度から導入される完全週5日制を前にして、学校行事の精選が叫ばれている時期でもある。中学校と高校がお互いの指導内容をすり合わせることは、「中学校段階、高校段階で真に必要とされる進路指導とは何か」を見極める上でも重要と言えるだろう。

また中高連携は、別の面でも必要性が高まっている。近年、多くの地域の高校入試において、推薦入試の拡大実施や選抜方法の見直しなどの諸改革が急速に進んでいる。さらに総合学科や国際科など新しいタイプの学科が増えてきており、普通科においても特色ある学校作りが模索されている。

多くの中学校の教師は、その急激な変化に戸惑いを感じているのも事実だ。生徒に適切な高校進学の指導をするために、より多くの情報を必要としている。高校入学後に学校不適応を起こす生徒を少しでも減らすためにも、高校側から中学校への多様な情報提供が、これまで以上に求められている。

実践 6年間を通した指導計画の作成 ❶

発達段階に応じて取り組みを決める

進路指導における中学校と高校の連携は、具体的には二つある。一つは中・高の教師が協力して、指導に関する共同研究を行うこと。もう一つは高校側から働き掛けて、中学校の生徒や教師に、高校での教育や生活を知ってもらう機会を設けることである。

まずは、共同研究の方法から考えてみたい。前出の仙﨑武先生は、生徒の発達段階に沿った課題を軸とした中・高進路指導の体系化を提唱する。

「生徒の発達段階に応じて、必要となる指導は変わってきます。そこでそれぞれの学年の進路指導課題を設定して、それに応じた取り組みを決めていくことが大切なのではないでしょうか。例えば、北海道立教育研究所が作成した『児童生徒の健全な発展を目指す発達課題』では、中学生は①持ち味の発見、②価値の明確化、③生き方の自覚